

景観要因の美学的考察 3

Aesthetic Approach to Spatial Factors of Townscape 3

黒川 威人

はじめに

本研究は既報の通り、昭和56年度文部省科学研究費の助成を受けた『景観に与える人工の影響の美学的考察』に基礎を置くもので、本稿は、前報のフォトモンタージュによるスライド写真を使ったモニタリング実験を引継ぎ、そこから派生した問題に若干の補遺を行ない考察を加えたものである。

なお本研究は、本報を持って一応締めくくることがとしたので、研究全体のまとめを付した。このため、一部資料は既出のものと同様であることをお断りしておく。

本研究はまた、昭和58年度金沢美術工芸大学共同研究費の助成対象でもあるので、本稿は前報に引続き当該助成研究報告をも兼ねている。

研究概要

研究全体の構成は、付図の通りであるが、基本的には、サンプルスライドに対するモニター（被験者）の反応とその分析による景観評価を軸としたものである。第2報ではこのうち、同図第II次モニタリング以降の右側部分、即ち、看板・サイン類等の視覚表示類が、景観評価に与える影響を、フォトモンタージュを使ったモニタリング実験によって、さぐろうとしたものであった。この実験は、既報の通り、不慣れのため、必ずしも満足できる結果は得られなかったが、一応視覚表示類が、消極的ながら景観をして『美しくない』と判断せしめている要因であることは明らかとなった訳である。

ここで、研究全体を振り返って見ると、サンプルスライド個々のフレームの美的評価もさることながら、本研究は本来、ある地域における景観の美的構成原理を、包括的に明らかにしよ

うとしていたことに思い当たざるを得ない。

そこで、地域全体のイメージを視覚化されたあるパターンとして取り出す手法の1つとして、前報で示唆しておいた、各フレームの評価値を撮影のコース順に並べてグラフ化する方法を試みた。これによって、あるコースはどのようなシーケンス（連続景）としてのプロフィールを持っているかが分り易くなったが、例えば金沢市の「見て廻りコース」のような、観光の用に供するようなコースの設定に当っては、大いに有効なのではないかと考えられる。

研究方法

第1報から行なっている手法、即ち、サンプルスライドをモニターに見せ、美しいか、美しくないかを答えさせる方法によった。

最初に、前回実験の欠点を補う意味で、モンタージュされた写真のみ10種各5枚（内訳はモンタージュ作業前の原画をそのまま複製したスライド1、モンタージュの度合の異なるスライド3、オリジナルスライド1）計50枚を使い、各モンタージュ度（0度、1～3度、オリジナルと呼ぶ）ごとに順番をランダムに入れ換えてモニタリングを行なった。即ち各サンプルスライドはそれぞれ5回のモニタリングを受けたことになる。なお、モニターは本学工業デザイン専攻生12名を使った。

以上の実験結果は、各サンプル毎のグラフを作成し、5段階の評価の変動を相互比較できるようにすると共に、10種すべてのサンプルの評価が、5段階でどのように変化したかが分かるよう一枚のグラフにこれを示した。

最後に、全サンプルスライドの評価値を撮影順（つまりコース順）に並べ換え、評価が一連

のグラフとして読み取れるものを作成した。

なお、追認のため新たに、前回のサンプル取材地である「金沢見て歩きコース」のうち、中央コースを意図的に逆まわりで撮影して得たサンプルを使い、モニタリングを行なった。結果は同様に一連のグラフを作成し、前のものと比較を行った。

実験結果

次に上記全ての実験結果を示す。写真はモニタージュに供した10種のスライドのオリジナルを除く4種である。紙面の都合上オリジナルスライドは割愛したが、前報に掲載してあるので参照されたい。(本誌の印刷画面ではほとんどモニタージュ0度と変わらないと思われる)

順序は、上段よりモニタージュ0度、1度、2度、3度の順であり、下欄はモニタリング結果の数値をグラフ化したものである。なおグラフの横軸右端は、割愛したオリジナルスライドの評価値である。

図1は、これらの評価値を一枚のグラフに納めたものであり、一回毎のモニタリングの各サンプルの評価値の変化が分るようにした。図中に示したように、実線はオリジナルのモニタリング値、実線細線はモニタージュ0度、点線は1度、2点鎖線は2度、1点鎖線は3度の値を示すものである。

図2は「中央コース」のシーケンスとしての評価に役立つべく作成したコース順のグラフである。具体的な該当地は最上部に町名などで示した。なお、本図は前回実験のために撮影したものについてであり、逆廻りによるものは紙数の都合により割愛したがグラフパターンはほとんど同一である。

実線は第1回目モニタリング、破線は第2回目のモニタリング結果を示す。☆印は、モニタージュされたサンプルであることを示すものである。



モニタージュ0度



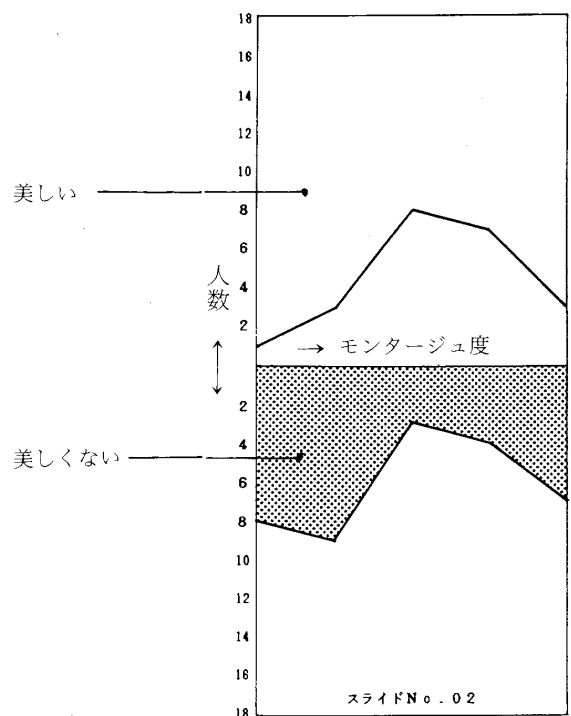
モニタージュ1度

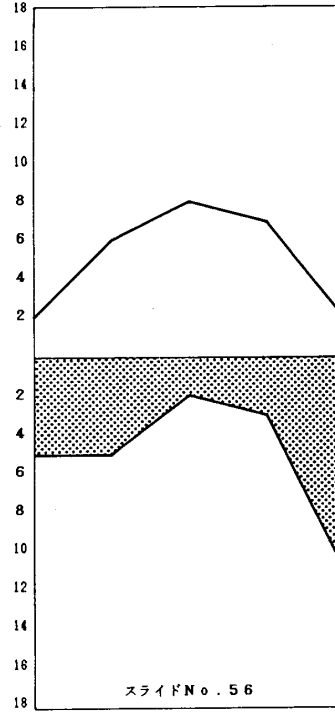
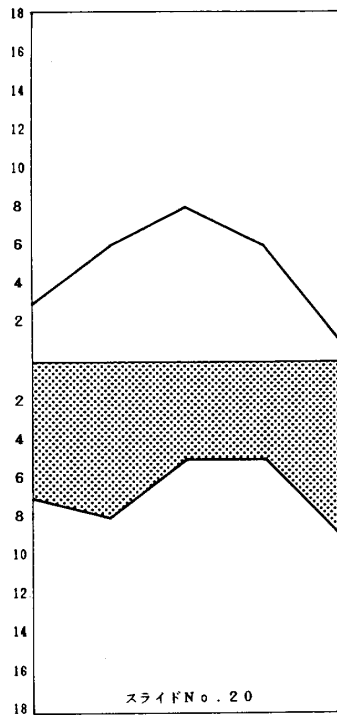
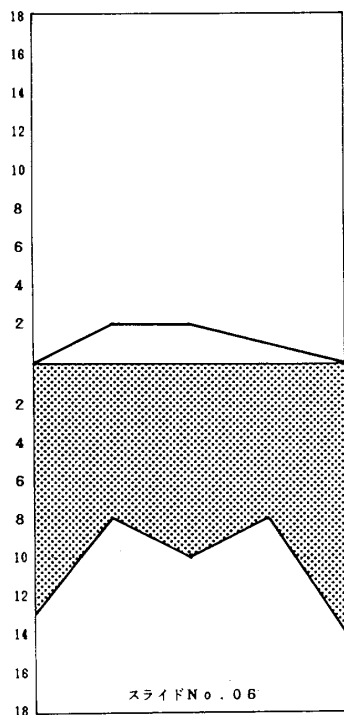
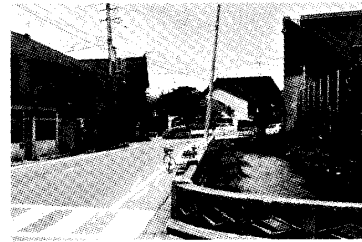
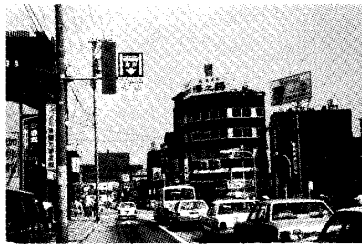


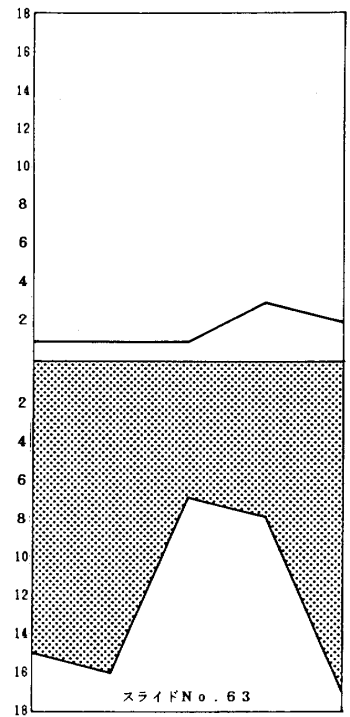
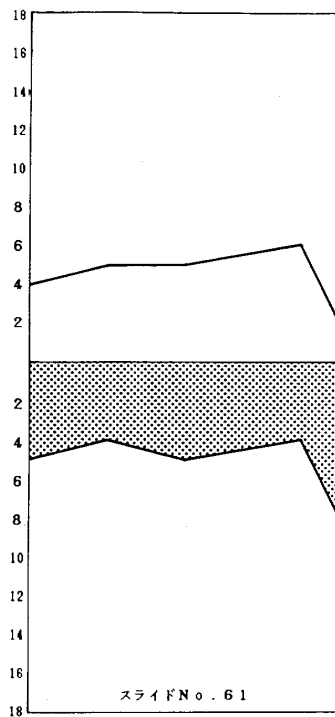
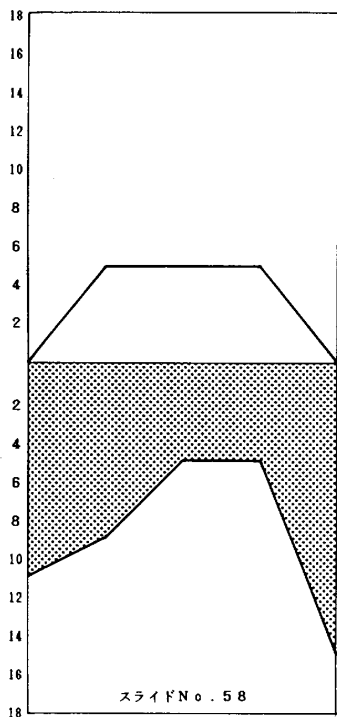
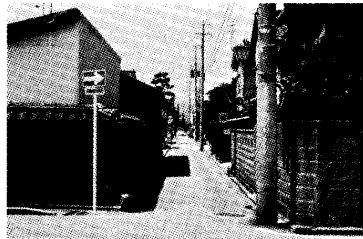
モニタージュ2度

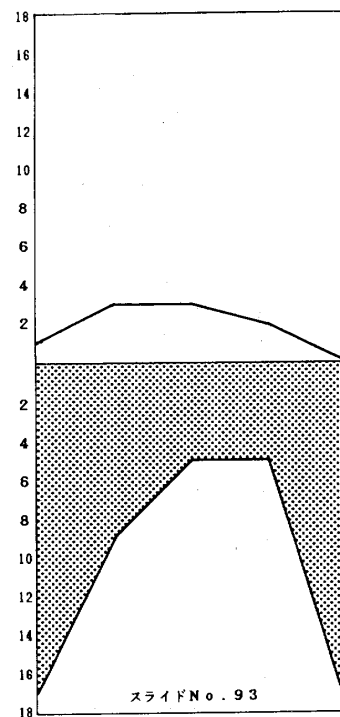
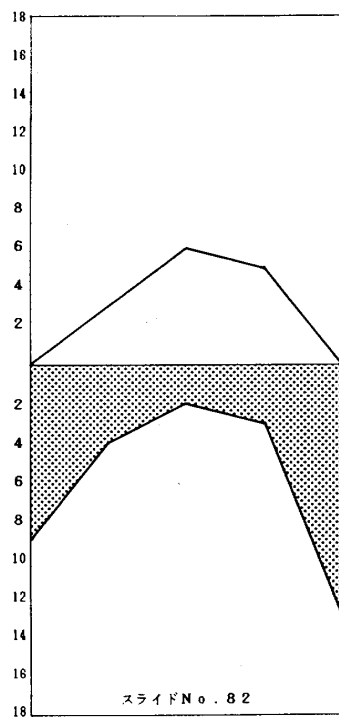
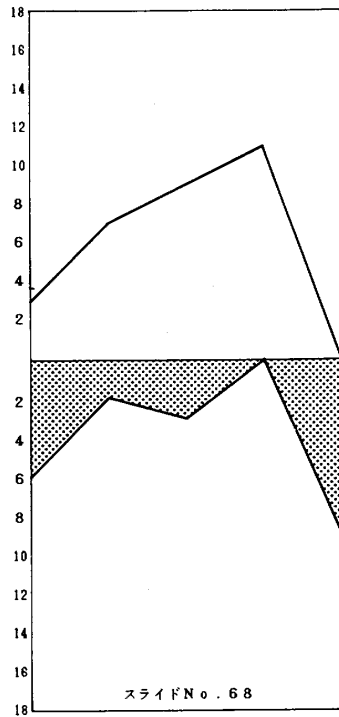
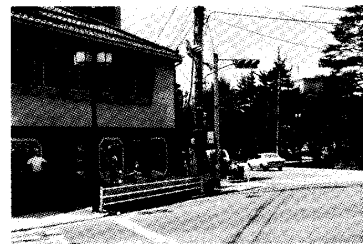
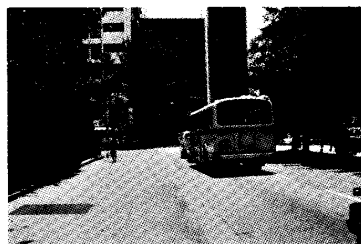
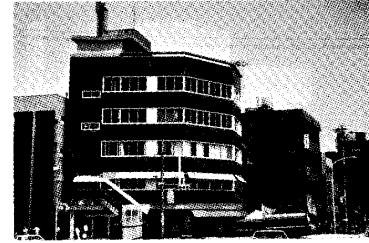
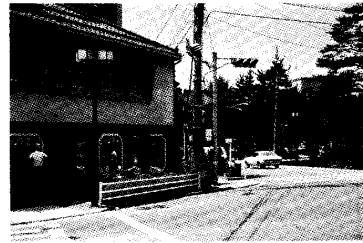
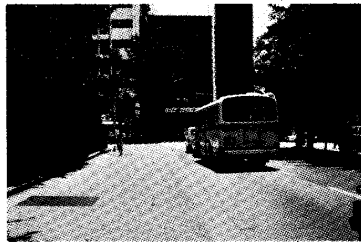
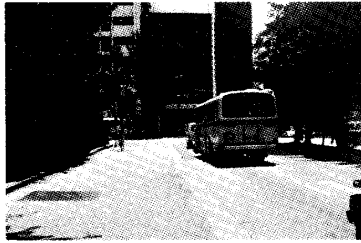


モニタージュ3度









結果の考察

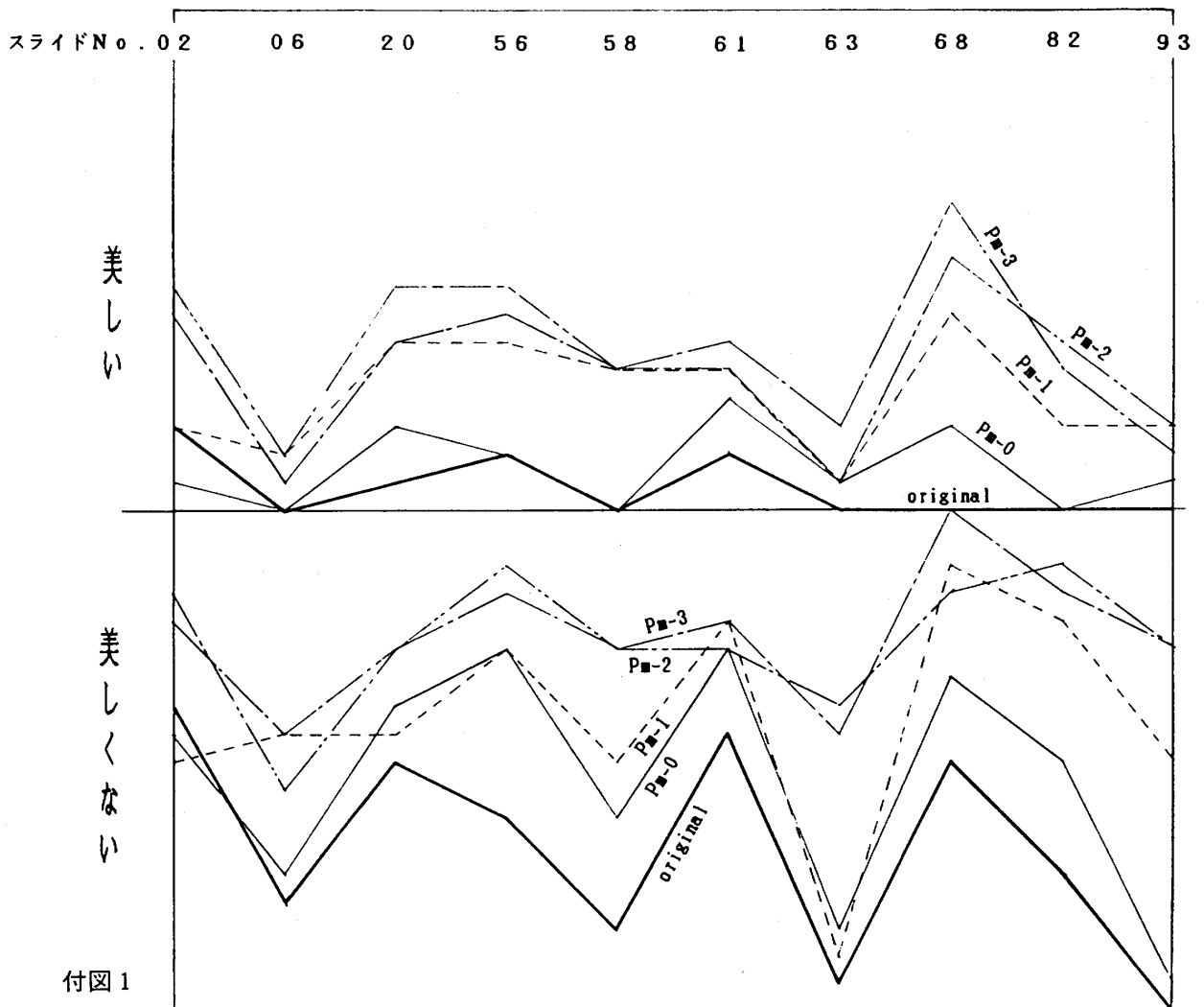
モニタージュに供した10例のサンプルスライドのモニタリングから何が得られたかを見てみよう。前回の実験では、ほとんど変化のないスライドでは（モニタージュ度1～2度のこと）評価値にほとんど変化が出ないのではないかと考えモニタージュ度3度のものしか使用しなかった訳であるが、今回はランダムに順序を入れ換えたことと相まって、予想しなかった結果が得られた。

第1に、順序は変わっても、サンプル固有の評価はそれほど影響を受けなかったことがある。

これは図1で見るとおり、10例のスライドの評価の変動を示すグラフが、ほとんど同一傾向を示していることで証される。但し、前回の

結論をしのばせて、美しくない方のグラフに若干の乱れ（線の交叉）が見られる。

第2に、10例の5段階における変化を個々に見てみると、第2度のモニタージュスライドにおいて「美しい」のピークがきている例が多いことに気付く。つまり視覚表示類を完全に消し去ってしまった第3度の方が高い評価を受けるとは限らないことであり、これも前回実験の結果を裏付けることとなった。ちなみに1～2度よりも3度の方が評価が高まった例は3サンプル（No63, 68, 61）しかなく、逆に1～2度よりも3度の評価の方が低い例は6サンプルを数えている。興味を引かれるのは、4サンプルのサンプルが第2度においてピークを示していることで、スライドNo20のグラフに見るように、第1度、第2度と次第に評価が上昇し、第



付図1

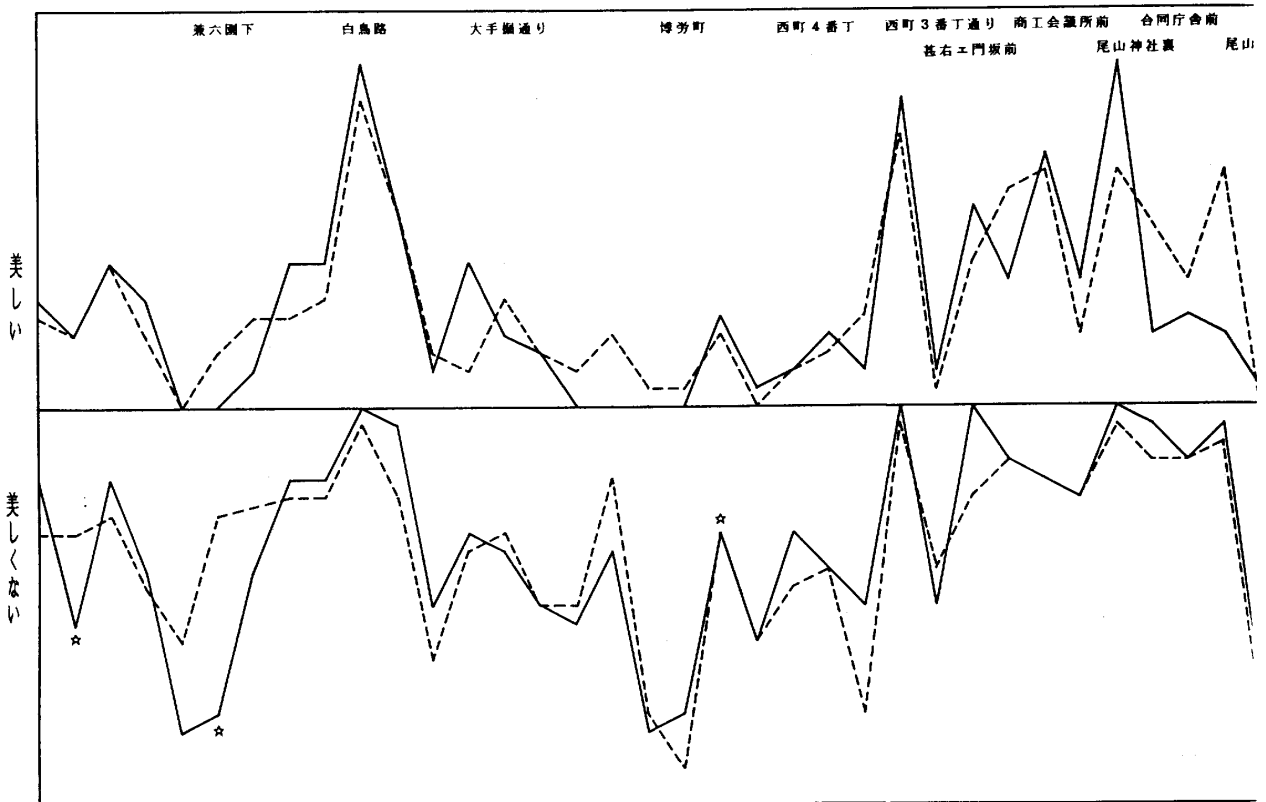
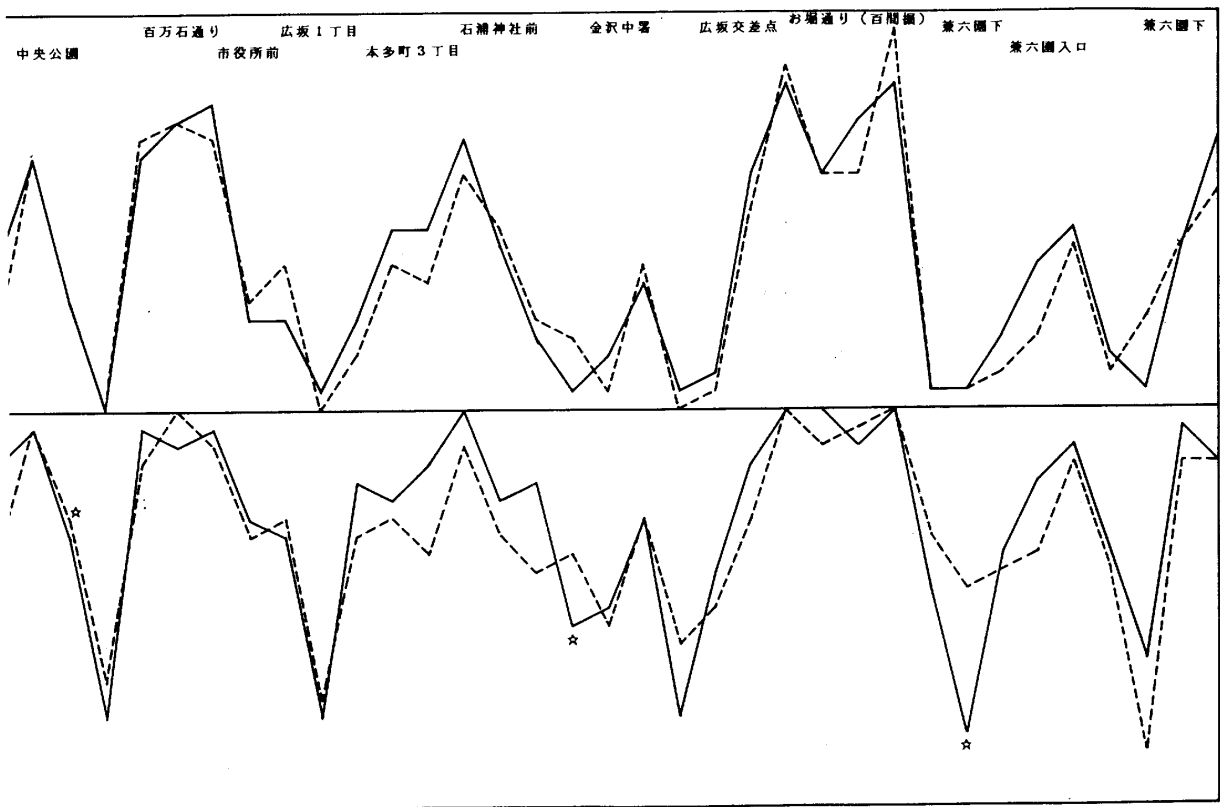
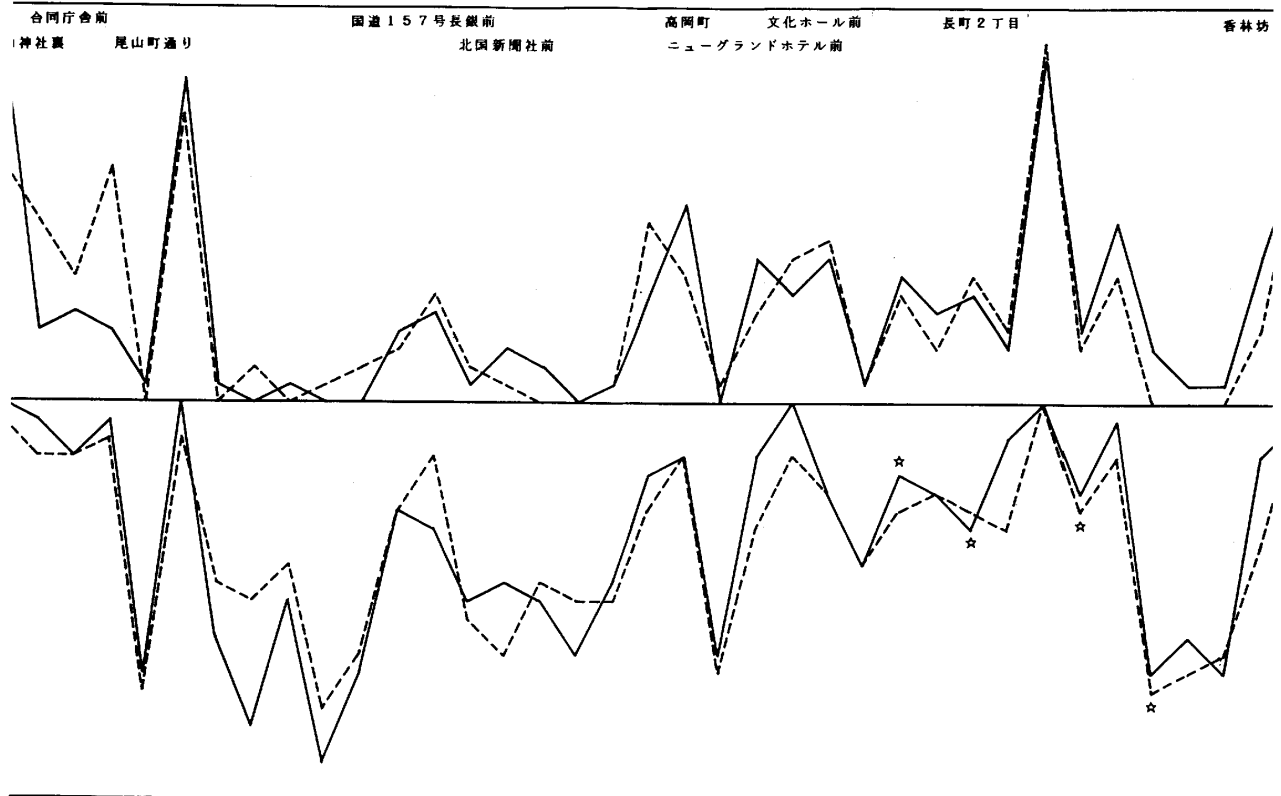


図2 中央コース





3度で下降に向いオリジナルで最低に落ちてしまおうというパターンが最も多かった事である。

これが何に原因するかであるが、恐らく、モニター角度が過ぎた場合、現実離れのした景観となり、返って被験者には美的とは映らなくなるということではないかと推察される。前報で指摘した通り、モニター技術が影響しているであろうことは否定できないが、その意味では、今回オリジナルスライドが大きく落ち込みを見せているのが興味深い。つまり「美しい」の評価にのみ関していえば、前回実験とは逆の結果が出ているからである。

これは、前回実験では大多数のオリジナル写真中に1部のモニタースライドが含まれていたが、今回実験では、逆にモニタースライドの中に1部オリジナルが含まれていたためと考えられ、この限りでは、評価というものは、あくまで前後における相対の意味合いでしかないといえよう。

研究のまとめ

もともとこの研究は、インダストリアルデザインに関わる当研究者が、最近の街並景観の変貌の大きな原因の一つを、工業製品の街中への進出の結果ではないかと考えたことに発している。景観に関する研究は、ここ数年の間に様々な事例が発表されているが、当研究者のようにインダストリアルデザインの立場からのものは今日に致るも寡聞にして知らない。その意味では大いにユニーク性は自負されるべきかも知れない。但し研究内容は、当初の意気込みに反して雑駁なものに終わってしまったのは遺憾であった。

「美しい」「美しくない」にいきなり分けてしまう方法そのものに対しても様々な疑問が寄せられたが、どのような景観であれ、人間の眼にはファーストインプレッションとしての好悪、あるいは快、不快の感情が働くものであり、特にモニターを依頼した学生諸君は、普段、美に

対する判定を日常的に下している訳であり、何ら問題はなかったように思われる。むしろ中間に「どちらでもない」を設けたこと自体あやまりではなかったかと現在は考えている。複数回のモニタリングを行えば、評価のゆれによって「どちらでもない」サンプルを抜き出すのは容易に思えるからで、三つのうち1つを選ぶという設定自体、直感力を鈍らせる結果としかならなかったのではないかと考えるからである。

人間の直感的判断は、判断の理由（例えば色の対比が美しい、建物の形が悪い等）を考えるより以前になされる筈であり、SD法のように言語（形容詞対）による判定はむしろその後に来るものではあるまいか。無論、こうした景観研究におけるSD法の効用は、心理学の応用としてとらえるときオーソドックスな基礎データを提供し得るものであり、これを否定するものではないが、本研究の第2ステップにおいて行なった、文章をモニターに自由に書かせる方法も、多くの様々な判断情報をモニター側から引き出すことが出来るという点で、捨て難い特長を持っている。感性による判断を先ず行い、次いで悟性による分析を行なうというプロセスを、モニター自らが体験できるという点でもすぐれているのではあるまいか。表1表2にその結果を再掲したが、スライド枚数とカード枚数の差が大きいものほど、モニターが一致した見方がある景観に与えていることになり、いわば評価の定まった景観といえる訳である。この評価の定まったスライドに関し、SD法を用いて、評価の傾向を追認して見ることは、それなりに興味の引かれるところであるが、1～2報を通じての共同研究者である本学藤浦鋭夫教授が、同一のサンプルスライドを用い、本年このテーマに取り組んでおられるので、その成果に期待したい。

おわりに

当研究者が景観研究に興味を持ち、最初に行なった研究は『街並景観における塀のデザイン研究』であった。これがきっかけで、視点は次第に環境デザインへと拡がって行った。フィー

ルドサーベイをインダストリアルデザインにおける必要不可欠のプロセスと考えるようになったのもこの頃からであり、学生達を引き連れて山村の調査に出掛けるようになったのもこうした研究から得られた知見、あるいはデザイン哲学といったものが大きく働いている。

塀の研究では、その後の仙台大地震のせいもあって、金沢市が学校など公的建物の囲みをブロック塀から生垣へと切り換えるようになったし、市民の景観に対する関心も大いに高まったように見受けられるが、最初に一石を投じた一人として、一応の成果があったと考えている。本研究は、それをさらに一歩進めて人工物全体を対象を拡げたのであったが、対象のあまりの広さに的を絞切れず全体が雑駁な研究で終わってしまった感が強い。

景観の問題はつまるところ住民一人一人の意識の問題に帰ってくるのであり、自治体の施策と相まって、一人一人の住民の意識の積み重ねにゆだねるしかないであろう。

G・パークの次の言葉『……世論は、タウンスケープを作り出す上で主導権を握ることも、数々のアイディアを出すこともできない。ただそこに存在するものを賞讃したり批難したりするだけである。』やバーナード・ルドフスキの次の言葉『どこの国の国民も自分に相応しい都市を持つものだ……』が、今更のように確かな響きを持って聞こえてくるのである。

末尾となったが、本研究は当初より共同研究者であった本学、藤浦鋭夫教授、山岸政雄助教授、服部光彦助教授の協力に負うところが多い。第2報の研究の後半以降は、ほとんど当研究者の単独研究となったため、冒頭の研究者名欄へは記載しなかったが、ここに諸氏のお力添えに対し感謝の意を表したい。またモニターを務めてくれた学生諸君へも記して謝意を表したい。

参考文献

- 「街並景観における塀のデザイン研究1——金沢」
—— 黒川 威人 金沢美術工芸大学々報第24号
昭和55年
「街並景観における塀のデザイン研究2——金沢」

—— 黒川 威人 金沢美術工芸大学々報第26号
昭和57年

「景観要因の美学的考察1」 黒川 威人
金沢美術工芸大学々報第27号 昭和58年

「景観要因の美学的考察2」 黒川 威人
金沢美術工芸大学々報第28号 昭和59年

「街の景観」 G・ハーク著 長素連, 長もも子訳
鹿島出版会 昭和55年

「人間のための街路」 バーナード・ルドフスキー著
平良敬一, 岡野一字訳 鹿島出版会 昭和53年
「道路景観—認知構造と評価尺度の構成—」 中村
良夫他

国際交通安全学会誌 Vol. 7 増刊号
昭和56年

(本学助教授・工業デザイン)

(昭和59年12月20日受理)

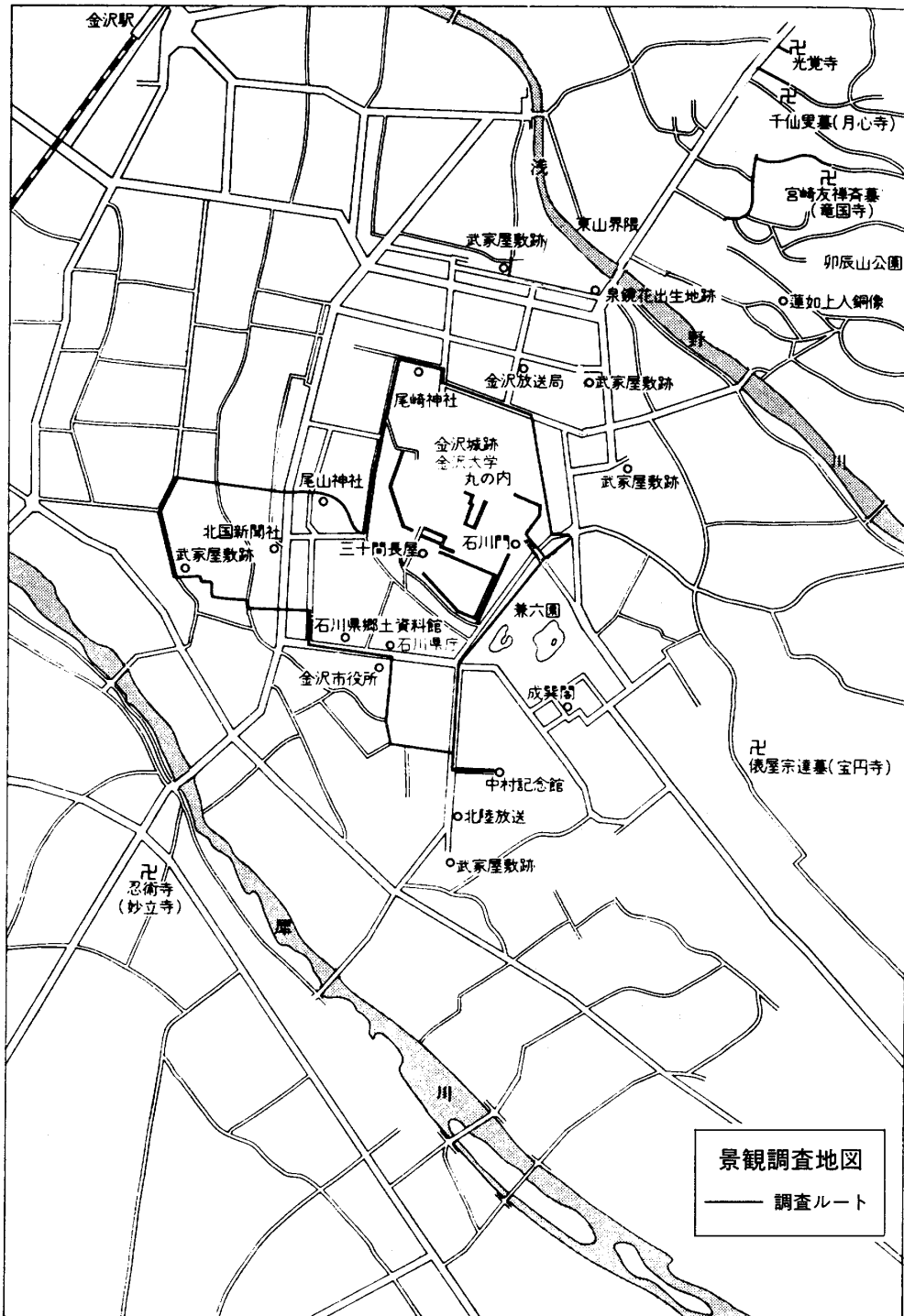
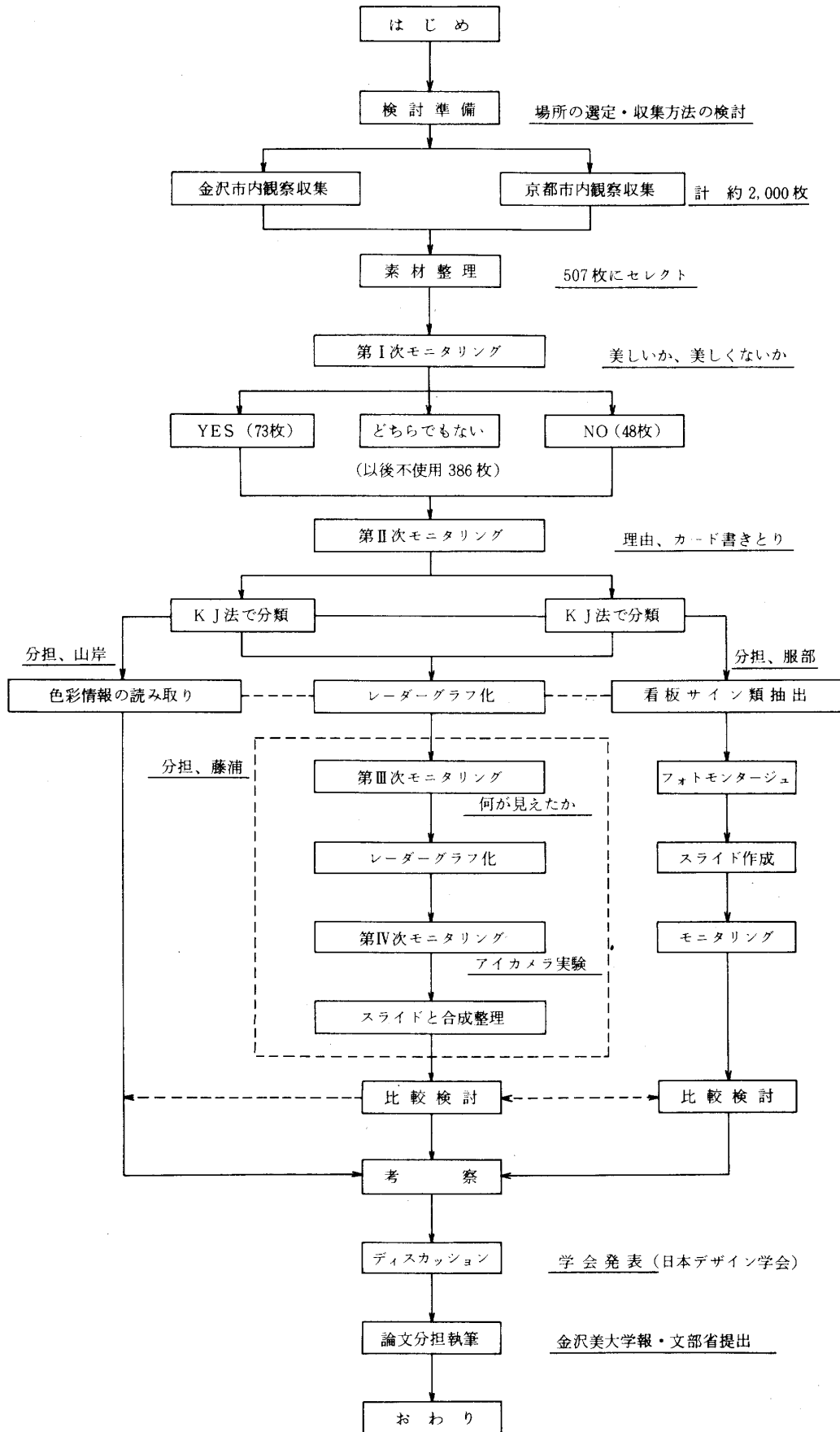


図1



付図 2

表1 景観因子細目一覧表

「美しい」景観因子										
コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	カード 枚数
1	建物	13	9	古い街並	7	広々している	8	6	広々とした自然	計
		11	10	建物			7	4	広い空間	
		10	7	寺社			2	1	公園	
		22	13	古い建物			17	11		
計		13	3	城	8	伝統的 人工物	22	8	格子戸・すだれ	計
		25	4	タワー			31	12	石畳・石段	
		94	46				16	3	赤い鳥居	
		10	2	舞妓			44	20	伝統的扉・門	
2	道・人	21	8	広い道	計	狭い道 汚い道	8	6	石垣	計
		4	4	曲った道			3	3	その他の左折建物	
		18	8	坂道			124	52		
		43	26	その他の道			41	31	木々がある	
計		5	4	道と背蔭	9	緑と樹影	17	6	街並木	計
		101	52				7	5	樹影・木陰	
		4	2	近代的			30	14	緑がある	
		13	8	スッキリしている			95	56		
3	スッキリ 近代的	17	10		計	川辺の風景	9	4	水に映る風景	計
		5	5	対比の妙			41	11	川のある風景	
		35	15	色の美しさ			9	4	橋	
		5	1	瓦に雪			59	19		
計		45	21		11	屋根	5	4	屋根	計
		11	11	おちつき			14	8	屋根瓦	
		8	7	古都らしさ			19	12		
		6	4	下町情緒			4	4	上天気	
5	雰囲気	3	3	明るい雰囲気	計	その他	4	4	ベースの美	計
		28	25				20	15	その他	
		8	5	青い空			28	23		
		6	5	空			78			
6	遠い山・空	11	7	遠景の山	計	分析不能	727			合計
		25	17							

表2 景観因子細目一覧表

「美しくない」景観因子										
コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	コード No.	タイトル	カード 枚数	スライド 枚数	小タイトル	カード 枚数
1	建物	33	24	建物	計	電柱	10	8	電柱	計
		10	5	家の壁			15	4	錆びたトタン	
		18	15	周りとの調和			4	1	洗濯機	
		61	44				2	2	板の橋	
計		29	14	狭い道	8	その他の 人工物	8	8	その他の人工物	計
		13	6	汚い道			29	15		
		42	20				16	12	ともかく汚い	
		26	13	看板と標識			13	13	ゴミゴミ	
3	看板と標識	26	13		計	ゴチャゴチャ	9	25	ゴチャゴチャ	計
		26	13				74	50		
		26	8	車			7	4	工事中の道・ 建物	
		26	8				7	4		
計		6	5	色が不調和	11	暗い	7	4		計
		13	2	汚い川			40	14	暗い	
		10	2	未整備の空地			40	14		
		6	5				7	6	その他	
5	色が不調和	6	5		計	その他	5	5	拒否反応	計
		13	2	汚い川			5	5	見通し不良	
		10	2	汚い川・ 空地			17	16		
		23	4				67			
計		23	4		合計	分析不能	413			合計